

志賀直哉年譜考(三)

——明治二十七年から明治三十年まで——

生 井 知 子

明治二十七年(一八九四) (数え十二歳・満十一歳)

1・6 熊川の半谷重固に、直哉は、新年の挨拶状を送る。(M27・1・6半谷重固宛書簡)

1・23 近衛各隊に聯隊旗を賜ってから二十年に当たるので、竹橋兵営内第一、第二聯隊とも軍旗祭を施行。(M27・1・24

「時事新報」)

この時か? 直哉は、聯隊の軍旗祭を見に行き、下士室で酌をしていた場末の酌婦のような女を非常に美しく感じた事があった。

それを小説化したのが『真鶴』。(創作余談)

5・3 錦織剛清を誣告罪で重禁固四年罰金四十円、山口淳を誣告詐欺収賄罪で重禁固五年罰金五十円、後藤新平を証拠不十

分で無罪とする判決が出る。(M27・5・4「日本新聞」)

6・20 午後二時過ぎ、東京で大地震。(M27・6・21「時事新報」)

四谷の学習院の校舎が倒壊した。不正な建築だったため。(座談会『学習院時代を語る』)

7・14 学習院の卒業式が、赤坂離宮で挙行される。(『学習院百年史』第一編)

来賓に大隈重信がいた。柳沢保恵(『学習院一覽』によれば、M27・7大学科卒業)が学生総代で答辞を述べる。直哉は、

柳沢の服装をしゃれていると思う。(座談会『学習院時代を語る』) *対談『緑蔭閑談』では、直哉は中等学科一年の時だけ卒業式に出席した、柳沢が総代だった、他の時は休みを待ちかまえていて旅行に行ったと語っているが、存疑。
この年の夏か？

直哉は、片瀬の水泳の参加資格が出来、同級の黒木三次(M17・12・21生まれ、『平成新修旧華族家系大成』)と二人、最年少で志願して参加したが、初めて家を離れた心細さと、宿舍の法善坊(龍口寺の門の側)に蚤が沢山いて眠れないために、神経衰弱のようになり、東京の祖父宛に毎日手紙を出し、仕舞いには「早く迎いに来るべし」という葉書を出す。児島喜久雄の兄・乙羽(『学習院一覽』によれば、乙和)が親切に世話をしてくれた。(『児島喜久雄の憶ひ出』)

*『児島喜久雄の憶ひ出』では『満九歳で初めて片瀬の水泳に行く資格の出来た時』とあるが、『学習院百年史』第一編によれば、参加学生は満十歳(初等学科五年級)以上の希望者である。

9

9・19頃

直哉は、初等学科六年に進級。……日清戦争黄海の海戦で戦勝の号外に、直哉は感激する。(『暗夜行路』草稿27二) *『時事新報』では九月十九日・二十日・二十一日に海戦勝利の号外が出ている。

この年か？

二州楼での同郷の懇親会に、書生に連れられて直哉は初めて参加し、家とは違う父の姿に淋しい気持ちになる。(『暗夜行路』草稿27二)

この年か？／翌年か？／前年か？(十三の時) (昭和三十年の『故郷は懐しいネ』によると六十二年前)

直哉は、祖父母に連れられ石巻の曾祖母(木村ヨシ)に会いに行く。(『宮城教育』アンケート回答) (『実母の手紙』)
曾祖母に連れられて青根温泉に行き、丹野七兵衛の家に泊まる。(『故郷は懐しいネ』)

この年か？(十二の時)

石巻で、髪を男のように短くしてつっぱを着て兵児帯を締めた九つか十位の女の子を、直哉は愛する。(『表』第五

号批評欄) この女の子は、七、八年後、激しい恋愛事件から、北上川へ注ぐ小川に投身自殺をした。(里見弴『君と私』

二十六)

この年か? (十三の頃)

直哉は、餓鬼大将(作中では沢村)(川村健二、『蝕まれた友情』四)や慶之がTを騙して殴るのに立ち合う。(『夢』)

この年か? / 前年か?

直哉は、末広鉄腸『雪中梅』『啞之旅行』、東海散士『佳人之奇遇』、石井研堂『鯨幾太郎』、矢野龍溪『浮城物語』、『昆太郎物語』(↓正しくはビーコンスフィールド『昆太郎物語』、『海底旅行』などを読む。『啞之旅行』と『浮城物語』を愛読した。『八十日間世界一周』は自家に厚い本があったが、通読は出来なかった。『狐の裁判』も自家に本があった。馬琴は読んでいない。押川春浪は読んでいない。(座談会『回顧』(『幼い頃』)『書き初めた頃』)『愛読書回顧』)

この年か? / 翌年か? (十三の頃)

直哉は、芝公園の自宅の蔵に入って、本をひっくり返していて、西洋の雑誌にバーン・ジョーンズの「ビッグマリオ」が載っているのを見、わ印だと思って閉じる。(『幼い頃』)『美術雑誌』「美術が好きになった経路」)

明治二十八年(一八九五)

(数え十三歳・満十一・十二歳)

1・?

有島生馬(壬生馬)、学習院初等学科六年に転入。(『初期白樺派文学集』有島生馬年譜)

有島生馬によると、学習院初等学科は他の小学校と大差なかったが、月曜の朝、第一時間目に必ず教育勅語を先生が朗読し、生徒は起立して謹聴してから授業が始まる点が異なっていた。(有島生馬『思い出の我』)

学習院では明治二十三年十月三十日以来、教育勅語を授業開始時などに読ませ、暗唱させることを習慣としていたが、明治二十八年一月から、毎週月曜日の第一時間開始前に、担当教官が、『教学聖訓』冒頭在教育勅語を読むことと

なつた。(『学習院百年史』第一編)

この年の冬か? / 前年の冬か?

直哉は、足袋を頭に乘せられた事を失敬だと言って志賀銀に食ってかかり、銀を困らせる。直哉が志賀留女の愛に増長してわがままで困ると銀はよく泣く。(『母の死と足袋の記憶』)

この頃から? 直哉は、「小国民」(M22・7・28・9)・「少年世界」(M28・1・S9・1)を読む。(『中野好夫君にした話』(『幼い頃』)

3 明治二十八年三月から三十七年一月まで学習院院長は近衛篤磨。(『学習院史』)

4・13 志賀直温、総武鉄道社会計係長となる。(志賀家系図)

この頃か? 倭遊会(後の睦友会)が結成される。

睦友会は、志賀直哉、有島生馬、佐久間忠雄、森田明次、川村弘、田村寛貞(陸軍少将の遺児。後、上野音楽学校教授)、松平春光、徳田速雄、米津政賢(後、農商務省勤務)、黒木三次(後、貴族院議員)、三條公輝、柳谷午郎(長崎出身の枢密顧問官・柳谷謙太郎の四男。後、正金銀行に勤務、海外勤務長し)、杉山得一(後、陸軍)ら十三人がメンバー。(『蝕まれた友情』(一)(有島生馬『思い出の我』)

6・21 回覧雑誌「倭遊会雑誌」第一号発行。(『倭遊会雑誌』より)掲載・写真S36・11「文学」)

回覧雑誌「倭遊会雑誌」は明治二十八年六月から三十年十月にかけてのものが、勝本清一郎の許に六冊残っている。会の名前は睦友会、倭遊会、睦友会と変わった。回覧雑誌には、受持の先生(号・降山)が、あちこちに朱の筆で注意や批評を入れている。(『睦友諸君ニ切ニ望ム、決シテ勢ヲ恐レテ屈スルナ。己レノ信シタルコトハ何処マデモ行ヘ。決シテ人ノカレコレ云フニ氣ヲ置クナ。決シテ外見ヲ飾ルナ。人ニ交ハルニハ誠心ヲ以テセヨ、人モ亦誠心ヲ以テ我レニ報ユベシ、人ノ膝ヲ折ルハ只義アルノミ』)という教えや、受持の先生が近衛篤磨に教育方針を聞きに行ったら「貴族ぶってはいけない、しかし貴族らしくせよ」と言われたという話が、書き込まれている。倭遊会という名には

硯友社の影響もあるようで、「黄葉」「春の屋主人」「春之屋のわらべ」「春之屋浪士」という号を使用している人もいる。遊ぶにも儉約してという考えも現れている。直哉の筆圧は強い。（座談会・近代日本文学史14 志賀直哉の勝本清一郎発言S36・11「文学」）

家族と熱海に滞在中の或る晩、波に月が映って美しかったことから思いついて、「金波様半月」という雅号にして、和歌や新聞に載っていた読み切り講談のようなものを書生に浄書させて出したりした。（中野好夫君にした話）

十三歳の頃、直哉は、雑誌に、その日の日日新聞の講談を書生に写させて出した。（座談会「白樺」座談会）

直哉は、雑誌になかなか投稿せず、稀に寄稿すれば、浪六か何かの剽窃みたいなものを書生に代筆させたものだった。（有島生馬『思い出の我』）

回覧雑誌は中等学科の初頃まで続いた。直哉は有島生馬が口絵に軍艦を描いたのを覚えていた。（『美術雑誌』『美術が好きなになった経路』）

夏

試験が済むとすぐ、鎌倉の有島家の別荘（有島生馬『思い出の我』によると滑川河口の砂丘の陰にあった。）に、直哉は、有島生馬、森田明次、佐久間忠雄と滞在。朝、寝床の中で小説を読み、有島生馬が、村井弦斎・ちぬの浦浪六などを朗読するのを聞く。途中、直哉だけ、及落を見に上京。有島生馬が試験に及第するよう、また餓鬼大将の川村健次が落第するよう弁財天に祈る。当時、直哉は芝の弁財天を信仰していた。川村は落第し、翌年片瀬の水泳で破傷風になり死去。（『蝕まれた友情』四）*ただし、『学習院史』によれば、正しくは川村健二で、明治二十八年に初等学科を卒業しており、M30・12「学習院輔仁会雑誌」48号「雑報」によると明治三十年六月に死去しているので、記憶が一年混同している。

7・15

直哉は、学習院初等学科を卒業。（『新潮日本文学アルバム 志賀直哉』掲載・卒業証書）

初等科を卒業する時の成績表では、勉強は三番くらいだったが、教場で行儀良くしていられたため品行点が悪く、

成績はずっと下だった。品行は八点・七点・六点とあるが、直哉は常に六点だった。六点は級に二、三人しかいなかった。学科の総平均点と品行の点数を合わせて二で割ったものが成績となる。一つでも五点以下があると落第。『S君との雑談』

* 「品行点ハ六点ヲ素点トシ品行ノ如何ニ由リテ之ヲ増減ス」「第三学期ノ各課目学期成績点四点以上及ヒ学年成績点各課目ニテ五点以上総教課ニテ六点以上ヲ得且学年品行点五点以上ノ者ヲ及第トシ然ラサル者ヲ落第トス」(『学習院一覽 明治三十年九月〜三十一年八月』「修学成績調査法」)との規定がある。

夏

直哉は、片瀬へ学校から水泳に行く。常立寺の本堂が宿舍。(『母の死と新しい母』一)

中学の頃二度、片瀬の水泳で三週間だけ祖母を離れて暮らした。(『暗夜行路』草稿2二)

8・30

つわりの為、志賀銀(数え三十三歳)が死去。(志賀家系図) (『母の死と新しい母』四) (『白い線』)

近所の医師が診察した。この頃、かかりつけの医師(中井常次郎)とは、縁を切っていた。相馬事件以来のこと。その後また診察してもらうようになった。(『母の死と新しい母』三)

銀の死の際、志賀直温は泣くが、志賀直温は泣かない。この時の印象は、後まで残って、直哉の直温に対する反感を形作る。(『暗夜行路』草稿27二) (『続創作余談』)生まれて初めて起こった取り返しのつかない事で、直哉は毎日泣く。

(『母の死と新しい母』五)

直哉は、学習院からの帰途、月々の命日はもとより、それ以外にもよく墓参りをした。(『実母の手紙』)

直哉は、中等学科に進学。……………

有島生馬によると、中等学科時代、直哉は作文が一番嫌いで、暗記や復習のいらない数学が得意。(有島生馬『思い出の我』)

直哉は、十〜十五歳位の間は海軍志望で、中等学科進学に際して、英独仏語の中から一つ選ぶ時に英語を選んだのは、

海軍軍人になろうと思つていたため。その後、実業をやろうという考えが出てきたが、実業家でありながら著作もしたいという考えだった。中等学科の終わりになってから、作家になろうという気持ちになった。『わが生活信条』

〔「荊棘の冠」序』『青臭帖』『身辺記』関連草稿〕

11?

志賀銀が亡くなって二月ほどすると、志賀家では、志賀直温の後妻を探し出す。直哉の七歳までの友達だったお清さんの姉の姉・お益さんと直温との縁談が起こり、更にお益さんの父から直温と高橋浩との縁談が起こる。〔母の死と新しい母』五〕

志賀直温は、高橋浩と再婚。赤坂の八百勘で式と披露。以後、直哉も志賀留女も、志賀銀のことを口にしなくなる。

〔母の死と新しい母』六、七〕

浩の実家は、漢学者で牛込にあった。〔志賀直三『阿呆伝』〕

この年

赤坂氷川神社の境内の有島生馬邸を、直哉は、友人四、五人で柳谷牛郎の驢馬馬車に乗って訪問する。「こわい話しは大好きだけれど、頭から蒲団を被って聞くのでなくってはいやだ」と語る。有島生馬の弟の里見淳（山内英夫）を見かける。〔里見淳『君と私』一〕〔里見淳『志賀君との交友記』〕

この年か？

直哉は、黒岩涙香『死美人』（M25・4、5刊）『巨魁来』（M24・8刊）、丸亭素人の探偵小説などを読む。黒岩涙香、丸亭素人、村井弦斎、ちぬの浦浪六の順で、著者を決めて、片端から読みあさった。便所の中はもとより、学校の往復の人力車の上、授業中、風呂、寝床でも読んだ。（座談会『回顧』）〔書き初めた頃』）〔愛読書回顧』〕

この年か？

放課後、直哉は、有島生馬と、彼の家のあった水川町まで遠回りをして帰り、探偵小説の話をし、自分たちが探偵だったらどんなに面白いだろうと街角に姿を隠してみたりした。（有島生馬『思い出の我』）

この年か？（十三の時）

直哉は、根岸の親戚の三ヶ月になる従弟（ハナの初児？）を見舞に行く。母親と一緒に眠っていた従弟は、母親も知ら

ぬ間に、直哉等が次の間で話している時に死去。(未定稿②『或る旅行記 青木と志賀と、及び其周囲』補② p.149)

この年か? (十三の頃)

直哉は、同性愛的な感情で有島生馬を恋する。二年程で普通の友情となる。『蝕まれた友情』四)

この年か? (十三の時)

直哉は、芝の御成門の勸工場で、舶来の仕掛けナイフを四十銭で買う。翌日学校で見せると、野崎という同級生に買ってきて欲しいと頼まれる。勸工場では二度目だからと五銭まけてくれる。その五銭を友達に返すのは理屈に合わないとい煩悶するが、苦しくなって渡す。『稲村雑談』『芝居熱』

この年か? (十三、四) (小学校のおしまい頃)

直哉は、貸本屋の本を大体読み上げ、他に何かないかと尋ねたら、木版物の春本を出してきた。『幼い頃』(座談会

『回顧』)

この年から? (中学に入ってから)

直哉は、『文芸倶楽部』(M28・1~S8・1)を買って読み出す。まず口絵の芸者の写真をすべて破り捨て、小説だけを読みたいのだという旗幟を鮮明にした。(中野好夫君にした話)

明治二十九年 (一八九六) (数え十四歳・満十二~十三歳)

この頃か? (十三四の頃) (十三歳の頃)

直哉は、『文芸倶楽部』の『化銀杏』(M29・2発表)を読んで、『殺すよりも死ねばいいと絶えず思っている事の方が遙かに残酷ではないか』という所が、妙に頭に残る。泉鏡花の作であることは忘れていた。『泉鏡花の憶ひ出』(中野好夫君にした話)『書き初めた頃』

2・7 直哉は、安房へ旅行中の志賀直道に書簡を送る。(M 29・2・7 志賀直道宛書簡)

2・9 直哉は、大雨雷鳴を犯してボートに乗りに行く。(M 29・2・11 志賀直道宛書簡)

2・11 直哉は、安房へ旅行中の志賀直道に書簡を送る。(M 29・2・11 志賀直道宛書簡)

この頃か？ (十四の時)

四谷の学校から向島へボートの稽古に行く時、直哉に失語症の症状が初めて現れたか？『暗夜行路』草稿7)

4・？ 志賀直道が兄弟と写真撮影。西おりき(数え七十九歳)、志賀直道(数え七十歳)、佐藤おうの(数え六十六歳)、石田茂宗(数え六十四歳)、半合重固(数え六十一歳)。(『新潮日本文学アルバム 志賀直哉』掲載・写真)

上半期 総武鉄道株式会社の持ち株は、相馬順胤が二〇〇〇株、志賀直温は一六〇〇株、石川栄昌は六七五株、青田綱三は六四〇株、二宮尊親は五〇〇株。相馬順胤は九州鉄道株式会社二〇九株、志賀直道は甲武鉄道株式会社五〇〇株を所有。(町田榮『総武鉄道株など』新「志賀直哉全集・月報8」)

* 第三版『帝国鉄道要鑑』によれば、明治二十九年上半期、総武鉄道株は、払込額五十円、時価百五十六円七十銭、配当率一割八分。九州鉄道株は、払込額四十一円、時価六十三円五十銭、配当率八分五厘強。甲武鉄道株は、払込額四十五円、時価百二十七円七十銭、配当率一割二分。

7・？ 横須賀の先の大津海岸に、直哉は、有島生馬・森田明次・佐久間忠雄と遊びに行く。和船を借り、直哉が漕いで猿島を目指した帰り、有島生馬が溺れかかる。『蝕まれた友情』一(『夢から憶ひ出す』) * この時の写真は、『新潮日本文学アルバム 志賀直哉』に掲載。

9 中等学科二年に進級。……………

10・10 学習院で剣道大会。(『学習院一覽 明治三十年九月～三十二年八月』「記事摘要」)

10・25 直哉は、『俚遊会雑誌』第三号に半月庵主人訳述第一回として書生に書かせた翻訳物を発表。(『座談会・近代日本文学史』)

14 志賀直哉』の勝本清一郎発言 S 36・11 「文学」

10・30 学習院練兵場にて、運動会開催。〔学習院一覽 明治三十年九月三十一年八月〕「輔仁会記事摘要」

11・7 学習院で柔道大会。〔学習院一覽 明治三十年九月三十一年八月〕「記事摘要」

この年か？／前年か？（十三の時）（中学校一年か二年の時）

志賀直道に、直哉は、新橋の近くの電友社でデイトンという百六十円の自転車を買って貰う。蝦茶がかった赤い塗りのもの。四日くらい直道につきまとい、せがんで買って貰った。〔祖父〕十九 〔自転車〕〔山荘雑誌〕「月見」

直哉は、五、六年間は自転車気違いといってもいいほど自転車を乗り回した。学校の往復も自転車。東京中の急な坂を自転車で登り降りすることに興味を持つ。〔自転車〕

直哉は、二六新報の秋山定輔邸に集まり、十何台で稲毛まで自転車の遠乗りをした事もある。解散後、山尾三郎と蕎麦屋に行き、初めて釜揚げうどんを食べ、まずいものだと思う。〔草稿〕第三篇五 〔自転車〕〔釜揚げうどん〕

直哉は、横浜往復の遠乗りも数多くした。直哉が自転車の前輪で子供を突き倒してしまった時、三歳年上で普段は仲が悪い伊達新之助（↓夢から憶ひ出す）の D が後を引き受けてくれた。高崎弓彦と蒲田の梅屋敷で一休みした事もある。往来での競走もした。その後、曲乗りにも興味を持った。〔自転車〕

志賀直道は、相馬家を辞める時に貰った一時金を株にして、その配当を自分の小遣いにしていた。自転車の金もそこから出した。横浜の正金銀行の株も持っていた。〔祖父〕十九

この年か？／翌年か？（中学の二年ぐらいに）

直哉は、高崎弓彦に連れていかれ、銀座のレマルシャンという靴屋で靴を作る。（座談会『レマルシャンの靴』）

明治三十年（一八九七）（数え十五歳・満十三〜十四歳）

この頃か？『金色夜叉』連載開始の頃（M30・1・1）は「読売新聞」を取っていなかったで、直哉は、毎日買ってきて読ん

だ。（対談『明治の青春』『金色夜叉』を面白いと思った直哉は、「読売新聞」を取って貰う。（座談会『回顧』（対談『秋の夜話』）

1・12、13、18、2・2、7、8

皇太后の危篤、崩御、葬送、埋葬のため、学習院は授業を停止。二月二日は一同奉送。（『学習院一覽 明治三十年九月、三十一年八月』「記事摘要」）

2・15

直哉は、回覧雑誌「撿遊会雑誌」第四号に「半月楼主人」の署名で『当時之少年』を発表。海軍組と陸軍組に分かれる少年達の姿を描く。好戦的な和歌二首も「半月」名で発表。（新『志賀直哉全集』補④）

「史伝」半月楼主人講演直哉速記として『義兄弟之別』上の巻も発表するが、書生に書かせたもの。（座談会・近代日本文学史14 志賀直哉」の勝本清一郎発言S36・11「文学」）

3・6、

新居商会在輸入した「ヴァイタスコープ」が東京神田錦町錦輝館で「電気作用活動大写真」として初公開。半月間満員の盛況。「カトランチック海岸怒濤の壮観」「李鴻章紐育ウォールドフ旅館出発の光景」「米国絶美の女優フラ嬢胡蝶の舞」「仏国女優ジャンヌダークの火刑」などの作品を見せた。（松浦幸三『日本映画史大鑑』（田中純一郎『日本映画発達史I』）

新居商会在は五月中旬から東海道方面の巡業に出るのを機会に、ヴァイタスコープを広目屋に譲り、広目屋の店員・駒田好洋が専らこの興行に当たる事となった。（田中純一郎『日本映画発達史I』）

直哉も日本に一番初めに映画が入ってきた時、錦輝館に見に行った。その時、エジソンの名を知った。駒田好洋が説明者だった。（座談会『映画対談』（対談『親友交歓』）

3・14 異母妹・志賀英子が生まれる。(志賀家系図)

直哉は、『十四まで一人つ子で我儘の出来た自分はカナリに我利々々盲者であつた』という。(草稿『第三篇』)

4・15 中等学科二年級は、鴻ノ台へ遠足。(『学習院一覽 明治三十年九月〜三十一年八月』「記事摘要」)

4・17 学習院学生一同、天皇皇后の京都行幸を正門前二重橋付近で奉送。(M30・6「学習院輔仁会雑誌」47号「雜報」)

5・21 輔仁会大会開催。(『学習院一覽 明治三十年九月〜三十一年八月』「輔仁会記事摘要」)

6・11 佐本鑑蔵とハナの結婚届け出。(川村渡『伊勢龜山・志賀直哉の文学』)

・ ・ ・ ・ ・ 麻布時代 ・ ・ ・ ・ ・

7・1 志賀家、麻布三河台町二十七番地に転居届け出。(新『志賀直哉全集』年譜)

志賀邸(以前は旗本・一柳の屋敷、『復元江戸情報地図』によれば、御書院番頭・一柳播磨守・五千石の屋敷)は、西隣が頭山満(後、英国人の建築家・コンデル)と新莊子爵(後、大島圭介)、東隣が佐々木侯爵(野村子爵?)、南側(向い)には、東から、西寛次郎大将、島津男爵、新田、フランス大使館のアンドレー、上泉海軍中將の屋敷、北側(裏)には赤坂歩兵第一聯隊があった。庭の北隅には子育桐荷があり、お祭りが毎年九月二十四日にあった。(志賀直三『阿呆伝』(実吉英子『若い頃の兄志賀直哉の憶い出』「志賀直哉全集・月報9」)

志賀邸の門は、谷中の寺から移した樺造の山門。土蔵は、行徳の質屋の蔵だった、樺造りの三階建て。コンデル邸では、おうむを飼っていた(↓『大津順吉』第二一)。車夫は房吉、門番は熊吉。(志賀直三『阿呆伝』)

三河台の庭は千七百坪で、木も多い自然な庭だった。(対談『緑蔭閑談』)

7・15 学習院の卒業証書授与式が赤坂離宮で挙行される。(『学習院一覽 明治三十年九月〜三十一年八月』「記事摘要」)

7・20 三週間に及ぶ片瀬遊泳演習開始。参加者は百二十人余り。(『学習院一覽 明治三十年九月〜三十一年八月』「記事摘要」)

この年の夏か?(十四くらい)

直哉は、森田明次、T、英国人の父を持つK、Tの義兄で築地の水上警察署長をしているH、年下のOと、箱根塔の沢の新玉の湯で一週間ほど遊ぶ。梅坊主一座を呼んで色々な芸をさせる。その後、森田と直哉は、志賀直道・留女と芦の湯に行く。森田は毎晩晩酌をする。〔夢から憶ひ出す〕

志賀直道が家政顧問を解かれる。(志賀家系図)

8・2
8・26

関屋三郎・せい夫妻の長女・せきが佐藤宗次と結婚し入籍。この時、佐本鑑蔵の戸籍は、下谷区中根岸町九十一番地(石川家の旧藩邸〔中屋敷〕のそば、柏書房『江戸―東京市街地図集成Ⅱ』にあった。(川村渡『伊勢亀山・志賀直哉の文学』)

9

中等学科三年に進級。

9・11

学習院で学年始業式。院長が、自転車が行っているが、健康上に害があるかも知れないし、二、三百円もして贅沢すぎるので、なるべく乗らないようにと訓諭。(『学習院一覽 明治三十年九月―三十一年八月』〔記事摘要別録〕)

9・?

川村弘が有島生馬邸を訪問した際、有島生馬に勧められ、儉遊会に入会。(『芳舟遺稿』所収M38・5・10川村弘日記)

9・20

直哉は、回覧雑誌「儉遊会雑誌」第五号に「半月」の署名で『儉遊会雑誌に付て余乃思ふ所を書す』を発表。雑誌の体裁や雅号について提言。芳舟、赤青童子、花桂、杉山が賛意を書き込む。(新『志賀直哉全集』補④)

海軍生徒の練習のために遠洋航海中だった軍艦・比叡が、横須賀に帰着。(M30・9・21『読売新聞』)

この頃か?

直哉は、高崎弓彦と、アメリカの遠洋航海から帰ってきた軍艦・比叡に、弓彦の義兄・大内田盛繁を訪問。米国土産のセルロイドのバッヂや米国軍艦の写真帳を貰って嬉しく思う。直哉は当時海軍志望だった。(『鈴木貴太郎』)

9・30

この時点で、三年級甲組は、松平武、一柳剛、伊達新之助、林三郎、細川護晃、川村弘、伊達基、三浦松次郎、冷泉為種、京極高義、大原四郎、徳大寺彬麿、西脇洛三郎、塩谷良、中西秀樹、小川武一、松平源次郎、松方義輔、田中秀介、黒木三次、志賀直哉、松平春光、杉山得一、三條公輝、酒井恭次郎、和田幹男、井上正義。有島生馬は七月に落第した為、中等学科二年級乙組。(『学習院一覽 明治三十年九月―三十一年八月』)

この日、直哉は自分の写真を撮影し、有島生馬に贈る。(『新潮日本文学アルバム 志賀直哉』掲載・写真)

10・25 直哉は、回覧雑誌「儉遊会雑誌」第六号に(『余瀟瀟子ノ・・・』)を発表。瀟瀟子は有島生馬。(新『志賀直哉全集』補

④

10・27 白馬会が開会。(M30・10・28「読売新聞」)

この頃か？ 直哉は、白馬会に出品された黒田清輝の『智、情、感』を見る。裸体画を平気で立って見ているという事には、意識

的な努力が要った。林三郎が丸善から、毎年、パリのパノラマ・サロンの図録を買ってきて、よく見せてくれた。直哉は、英国のローヤル・アカデミーの図録を自分で買って来た。(『美術雑誌』「美術が好きになつた経路」)(『幼い頃』)

10・28 中等学科三年級以上の学生百五十五人が田無及び浦和地方に二泊行軍。(『学習院一覽 明治三十年九月〜三十一年八月』

「記事摘要」

12・2 この日発行の「学習院輔仁会雑誌」第四十八号・目次の「武事」欄に「秋季行軍 半月生」とある。本文は『秋期行軍』という題で無署名。あるいは直哉の筆によるものか。

12・9 学習院学生は、横須賀港に新造軍艦の富士・八島を参観に赴く。(『学習院一覽 明治三十年九月〜三十一年八月』「記事摘要」)

12・17 学習院中等学科六年の志賀直方が院規違反で退院処分となる。家に忘れた乗馬靴を取りに帰ろうと、門衛の制止を顧みず、院規を犯すと公言して出門したため。(『近衛篤磨日記』)

処分の通知を受けると志賀直道は、退院処分の理由が破廉恥の行為かどうか舎監に聞いてくるよう、直方に求めた。舎監が「今度の処分は諸葛孔明が泣いて馬謖を斬る所以だ」と述べたと聞いた直道は、粗暴は若い時にはありがだと快く許した。(志賀直方『肝に銘じた霞山公の教訓』S12・3「青年」)

12・18 志賀直方が学習院院長・近衛篤磨に呼び出される。直方は行こうとしないが、志賀直道は、臨済が百丈禅師の門下で

修行中に九十日の夏を破った際、呼び出して六十棒の罰棒の後に追い出したという百丈禪師の師情を例にひいて、是非同うようにと懇ろに勧めた。(志賀直方『肝に銘じた霞山公の教訓』S12・3「青年」)

近衛篤磨は、直方に自暴自棄にならぬようにと諭し、近衛家の家訓に「ぶらず、らしく」とあるが、その境涯に順じて、分度を守り、傲らず高ぶらぬようにという教訓だとして、自重と修養を求める。(志賀直方『肝に銘じた霞山公の教訓』S12・3「青年」)(近衛篤磨日記)

この年頃まで (十四五まで) (十五くらいまで) (十五まで)

直哉は志賀直道と志賀留女の間に寝る。寒い晩など、大きな祖父の懷に小さくなって抱かれているのが好きだった。それにもかかわらず、祖父母から猫かわいがりをされたという記憶は一つもない。(『憶ひ出した事』(『稻村雑談』「祖父」)(『山莊雑話』「月見」)

この年頃まで (十四五歳まで)

直哉は、極端な忠君愛国主義者だった。もし天子様が自分に一言「死ね」と言われれば「何故でございますか」とは反問しないつもりだった。(『暗夜行路』草稿13十八)

この年からか？ (教えに接するまでの三四年間)

直哉に、同性愛体験あり。(『大津順吉』第一一二)

『十四の夏から十七の夏、教えに接するまでは自分は慾情に就いては全くルーズな考へを持つて、又ルーズに行つて来た。どんな時にでも男の恋人を二人か三人持つてゐない事はなかった。』という。(草稿『第三篇』二)

この年から？ (十四五)

牛込横寺町に住んでいた森田明次は、直哉らに尾崎紅葉の噂をする。家庭教師をしていた当時大学生の中内蝶二の受け売りで、森田は、直哉らが弦斎・浪六・涙香を愛読しているのをけなし、紅葉・露伴・鷗外・逍遙をよしとした。

直哉は露伴『五重塔』『対顔體』は分かったが、紅葉『多情多恨』(M30・7刊)は読み続けられず、森田の本を借りっぱなしにし、七、八年後に通読して感服した。紅葉の小説では『青葡萄』も読んだ。森田明次は文学好き・自転車好きで、直哉とよく遊んでいた。(『夢から憶ひ出す』(座談会『回顧』)、『愛読書回顧』)、『S君との雑談』(対談『秋の夜話』)

この年か？

下級生・滋野清武(M30・12「学習院輔仁会雑誌」48号「雑報」)によれば、M30・10(退学)の華族女学校の女学生に対する態度がけしからんから殴ろうと直哉が言い出し、有島生馬らと実行。通り掛かった松方義輔が訳も分からず滋野を投げ飛ばした。後、滋野は飛行家になった。(有島生馬『思い出の我』)、『人を殴った話』(平木國夫『パロン滋野の生涯』)